

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail：nishikouarigatou@gmail.com

Instagram：nishikouarigatou
twitter：@nishiko_arigato
Hashtag：#ありがとう西高

西高の歴史を振り返る

21世紀に入り県内有数の人気校となった大宮西高校は、まさに「円熟期」を迎えていた。第5回目となる今回は、2001年から2011年（東日本大震災）までの西高の歴史を振り返る。

第5回 大震災発生、西高の一致団結

2001（平成13）年、さいたま市の誕生により、西高は現校名である「さいたま市立大宮西高等学校」となった。翌2002（平成14）年には、土曜日の授業が廃止され、週5日制となる。2003（平成15）年には新科目として「総合学習」「情報科」が新設された。

2004（平成16）年に大学進学者が150名を超え、卒業生の約半数が大学進学する時代に。西高は大学、専門学校、そして就職と、幅広い選択が可能となった。2008（平成20）年には普通教室にエアコンが設置され、夏場の授業環境が改善された。2009年から翌2010年にかけて、普通教室がある北校舎の耐震工事が行われた。この耐震工事が、翌年の東日本大震災の際に、多くの生徒の命を救ったのかもしれない。

2010（平成22）年3月、多くの西高生にとって思い出の場所の一つであった旧体育館が解体。駐車場に変わった。

そして大震災の日。創立50周年を迎える直前だった2011年3月11日、午前中は体育館で47期生の卒業式が行われていた。午後になっても別れを惜しむ卒業生と、部活に励む在校生が多く西高に滞在していた。午後2時46分過ぎ、突然の大きな揺れに襲われる。

記者は当時1年生で、北校舎3階の新聞部室で被災。大きな揺れで立っていられなかった。机の脚にしがみつき、必死で揺れが収まるのを待った。生徒の悲鳴や、隣の教室で活動していた吹奏楽部の楽器が落ちる音が聞こえた。揺れが収まり廊下に出ると、白煙が舞い上がり、北校舎と渡り廊下の間の床が外れ



大宮駅前で震災の募金活動（50周年記念誌より）

て、下の階が見えていた。天井も一部崩れ、柱にはひびが見えた。

その後、卒業生を含む全生徒はグラウンドに避難。幸い、大きな怪我をした生徒はいなかったが、家族との連絡が取れず、多くの生徒が不安げに携帯電話を見ていた。交通機関の運休もあり、すぐには帰宅できなかった生徒が多くいた。西高では多くの先生方が居残り対応。午後11時過ぎ、最後の生徒を保護者とともに西高から送り出すことができた。

地震で北校舎が半壊。普通教室の利用が一時できなくなった。この年の終業式は南校舎の特別教室や合宿所に分散し行われた。

未曾有の大災害、それに続く原発事故。「私たちにできることはないだろうか」と誰もが考えたことだろう。

西高では自主的な募金活動が立ち上がった。当時の2年生（48期生）が大宮駅前で義援金募金活動を発案。3月25日から31日までの1週間、寒空の下、毎日30～40人が大宮駅前で募金を呼びかけた。西高生のべ200人が参加、生徒だけでなく多くの先生も駅前に立った。1週間で集まった募金額は226万8,977円（50周年記念誌より）。改めて西高生の行動力そして団結力、そして生徒と先生方との信頼関係がわかる出来事であった。



上写真が2003年頃、下写真が2018年度の様子。

あの場所は、今 -自販機コーナー編-

在学時の記憶に残る場所として、北側校舎2階の自販機コーナーを挙げる卒業生は多いのではないだろうか。渡り廊下の結節点という「交通の要所」。ベンチも多く設置されている。休み時間に2階の自販機前に待ち合わせるのが日常だった、という声も聞いた。現在も同じ場所に自販機はあり、記者の在学時より品揃えが充実したように感じる。

2000年代の卒業生である記者は、紙パック飲料の自販機も覚えている。こちらは学食前に設置されていて、定番の「いちごミルク」は昼前に売り切れていたことも多かった。隣には某製薬会社の自販機もあり、こちらは水分補給を主目的とした製品が並び、運動部の部員がよく利用していた。現在は3学年のみということで、2階の渡り廊下に2台の自販機が設置されている。

実はこの自販機、授業内の持ち込みやポイ捨て増加など、度々問題視されてきた経緯がある。2002年の「ペットボトル導入」に際して、分別の増加による混乱が大きな議論となり、生徒総会での議決や職員会議を経て、「ゴミの分別活動を徹底すること」を条件に取扱いが始まった。2002年に記者が入学した当時、2階の自販機前で談笑するのは既に当たり前の光景で、校則が厳しかった中学時代と比べて自由を身近に感じたものだが、今日まで続くこの光景は、実際に生徒の自主独立の象徴でもあったのだ。この身近な「自由の象徴」は、西高の自由な校風を纏ったまま、新校にも受け継がれて欲しいものだ。（石川）

大宮西高

友人、お客、人に恵まれ歩む代替わり

大越 憲和さん（寿司店店主）

野球部一色だった大宮西高時代。進路の選択に思い悩むこともあったというが、先生のひと言に心を固めた。その後はどのような道のりだったのだろうか。

自分の代から貴重な食材を仕入れるようにしたのは、埼玉の市場を盛り上げるため。「万人受けしなくても」と語るも、連日カウンターは賑わう。前回に引き続き、大寿司（ひろずし）店主の大越憲和さんに話をうかがった。



カウンター越しに笑顔の絶えない大越さん。店を継いだ頃は高校時代の友人にも「ずいぶん助けられた」と語る。

かったようだ。「クラスでアイスクリーム屋さんをやったんですよ。盛り上がりましたね」。それまで野球部一色だった大越さんも、このときのクラス全員の一体感は忘れられないと遠くを見つめた。

野球部仕込みの張りのある挨拶を気に入ってくれたお客さんもいたそう。意外なところで野球部の経験が役立ったと大越さんは笑う。

そんな修行も8年を迎えたある日、突然、お父さんが倒れたと連絡が入る。一命は取り留めたものの、寿司が握れる身体には戻らないお父さんに、大越さんは実家の寿司店を継ぐ決心を固めた。今から20年ほど前のことだ。

「引退後」に自由を謳歌

恩師の助言から、家業を継いで寿司職人の道を歩もうと決めた大越さん。高校3年の夏で野球部を引退すると、その後は「楽でした」と笑う。「仲間は、本格的に受験シーズンに入るわけですが、僕は就職ですから」「卒業してから就職で必要になるので、原付の免許を取りに行ったりもしました」。

放課後は教習所へ通うため、時に原付用のヘルメットを抱えて登校したこともあったそう。 「本当はそんなモノ持って来ちゃいけないんですけど、先生たちは黙認してくれてました」。当時、原付やバイクの免許を取るにも学校の許可が必要だっただけに、大越さんは先生方の理解に支えられたと感謝をにじませる。

学校行事では、高校3年の文化祭が印象深

マニュアルのない修業時代

高校卒業後、大越さんは銀座の寿司店に就職する。いわゆる外食チェーン店ではないからマニュアルはなく、見聞きしたことを身体に叩き込む、文字取りの修業時代を過ごした。「最初は本当に下働きですよね。掃除だったり、先輩が作る賄いの手伝いだったり」。休日も「自分で魚を買ってさばいたり、友人の料亭に手伝いにも行きました」。

何年間修行をしたから寿司を握れるという世界ではない。親方に仕事ぶりを認められて、初めてカウンターに立つことが許される。さらに、親方の握った寿司しか食べないという常連も少なくない。それでも「『お前が握れ』と言ってくれる方もいて、そういう方に助けられました」大越さん振り返る。野

世代交代、「良さ」を活かして

店を継いだばかりの頃は「離れていくお客さんもいました」。一方で「未熟な頃から見守ってくれてる方もいます」良いお客さんに恵まれたと目を細める大越さん。「代替わり」する母校に何を思うのか。「西高は自由だけど規律は守れる節度がありました」そこは良かったとしつつ、新校にも「全国から注目される存在になれば」と期待を込める。

取材終盤、「最後に良いですか」と大越さん。「目標はマスターズで甲子園出場です」大宮西高野球部OBとして熱く締めくくった。